

# 「フィールドワーク」して学ぶ

## ボランティアとしてのかかわり, 調査者としてのかかわり

西崎伸子

ご紹介にあずかりました西崎です。よろしくお願いたします。

今日の第2部パネルディスカッションは、「フィールドワークの現場からみえてくる世界」というテーマです。一口にフィールドワークといっても、フィールドワークをする人の立場や目的によって大きく変わります。この発表では、私自身がアフリカに赴いて、初めてフィールドワークをおこなったボランティアとしてのかかわり、そして調査者としてのかかわり始めたフィールドワーク初期の経験を中心にお話したいと思います。「まなぶ・かかわる・つくりだす」という今日のトピックの中で、「現場に学ぶ」が私の話の中心になります。

アフリカにおける初めてのフィールドワークは、今から7年前に青年海外協力隊の隊員として1996年から2年間アフリカに行ったときでした。その後京都大学のアジア・アフリカ地域研究研究科に入学し、大学院生としてフィールドワークをおこない、現在も毎年アフリカに行き続けています。この2回のフィールドワークには、「アフリカの人々の生活を理解する」という漠然とした共通の目的があって、これをフィールドワークという共通の方法で実現しようとしてきました。しかし、この二つのフィールドワークをおこなうなかで、「地域のこと、人びとのことがわかっている」、という私自身の実感は大きく異なっていました。なぜ、このような違いが生じたのかを、当時のフィールドワークの方法を振り返りながら、見ていきたいと思っています。

### 自然保護区で協力隊員としてはたらく

さて、フィールドワークをどのようにしたのか、という前に、どこで何をしていたか、ということ

に、最初少しふれたいと思います。私が協力隊の隊員として赴任したのは、東アフリカのエチオピアという国です。協力隊には、数十種類の職種があり、自分の得意とする分野で、日本で試験を受け、その職種で海外に派遣されます。私の場合、当時生態学、現在の環境教育という職種で派遣されました。赴任したのは、エチオピアの野生動物保護局というところで、国立公園など、国内の自然保護区を管理する部署です。

エチオピアには、いくつかの自然保護区があるのですが、私は赴任半年後に、センケレ自然保護区に仕事場が決まりました。センケレ自然保護区は、首都アジスアベバから350キロほど南下したところに位置する、非常に小さな自然保護区で、ウシ科でアンテロープの一種のスウェニーズ・ハーテビースト (swayne's hartebeest) という野生動物がいます。これは、エチオピアの固有種で、かつては国内に広く分布していたのですが、生息域の縮小などによって、現在このセンケレ自然保護区にしかない固有種となり、絶滅危惧種に指定されています。

### 地域の人々を考慮した自然保護

なぜ自然保護区で働くことがアフリカで求められているかの背景を少し説明します。アフリカにおいて、自然保護区がつくられたのは植民地時代だといわれています。エチオピアでは、1960年代に本格的に自然保護区がつくられ始めました。そのおもな方法は囲い込みです。野生動物が豊富にいる地域を囲い込むといっても、もちろん広大な土地にフェンスをすることはできません。境界線を引いて自然保護区内に管理事務所を置き、パトロールなどをして人が入ってこないように管理を

するのがおこな方法です。しかし、自然保護区がつくられた多くの地域には、もともとその地域の人びとが生活をしていました。人びとは、自然保護区がつくられる以前は、家を建てるために木を切ったり、調理をするための燃料木をとってきたり、ウシの放牧をおこなったりしていたのですが、こういった活動が何ら代替案を与えられないまま、囲い込みによってすべて禁止されました。

このような野生動物保護を優先した政策は、人びとの不満や怒りを招きました。人びとは禁止されたといっても、日常的にこのような自然資源に依存して暮らすわけですから、さまざまな自然資源をめぐる競合がおり、自然保護区の管理者と地域住民の間に激しい対立を生むこととなったのです。

そこで、協力隊隊員のときも、大学院生のときも、「自然保護区と周辺住民の間の対立を解決するためにはどうしたらいいのだろうか」ということが、フィールドワークをするときの中心のテーマとなりました。私が初めてアフリカにいったのは、1996年ですが、70年代前後からいわゆるトップダウン型の「開発援助」が批判されるようになり、住民参加や住民主体などのキーワードとともに、より地域の人びとのニーズを考慮した開発援助のあり方が模索され始めました。野生動物保護プロジェクトを考える場合でも、これまでのように野生動物さえ保護できればいいといった考え方ではなく、地域の人びとのことも考慮した野生動物保護のあり方が模索され出していたのです。従来、野生動物保護プロジェクトの立案は、生態学者などいわゆる動植物の保全を専門に考える人びとがその計画・実施に大きくかかわっていましたが、人類学や社会学など、人間の暮らしに焦点をあてた研究が強く求められるようになったわけです。

### アンケート調査

さて、このような理由からフィールドワークを始めましたが、今思えば協力隊時代は、アフリカでの初めてのフィールドワークということもあって、住民とどのように接点をつくっていいのかが、まったく分かっていませんでした。周辺住民を対象としたフィールドワークをしようとしているのですから、村に住みこみながらフィールドワークをすることが必要となります。しかし、当時の公園事務所長やその他のエリート役人に、

公園スタッフが周辺村に住むという発想はまったくありませんでした。それもそのはずです。自然保護区をきちんと管理するには、公園スタッフと村人が仲良くなるということは御法度とされていました。違法行為を見逃すといったことを防ぐために、自然保護区と周辺住民とは、切り離して存在することが基本方針だったからです。ですから、私は、滞在期間すべて自然保護区内の住居兼公園事務所に住み、ここを拠点に周辺の村に出かけました。村までは近いところで歩いて10キロでした。この周辺ではバスなどの移動手段もなく、人々は近隣の町まで何キロも歩いて移動します。一方で公園スタッフは車にのって移動するのがふつうです。私の場合、この地域に初めてきた外国人ということもあって、公園をパトロールする銃を携帯したスカウトと常に一緒に行動し、車で村に乗りつけ、そこで村人を数人呼びだし、アンケートに答えてもらうということを繰り返しました。

アンケート調査では、薪をとりに行く場所、水を汲む場所、放牧の場所を聞きました。アンケート調査をしたときの村人の答えは、薪は森に取りに行く、水は井戸までロバでいく、といった決まりきった回答でした。そして予想したように、保護区内で木を切っていないし、ウシも放牧していないという答えが返ってきました。村人は一見従順で親切な人ばかりでしたが、決して本音は話さない、という固い決意のようなものを感じました。私が期待していたような、村人からの「家にこないか」とか「食事を一緒にどうぞ」といった誘いはほとんどなく、アンケートが終わると保護区内の事務所に帰る毎日を繰り返していました。

### 環境教育と改良かまど

アンケート調査をいくら繰り返しても村人の本音は見えず、一方で村人は自然保護区内で放牧をし、木を切り続けているという光景をまのあたりにして、協力隊の任期が終わる直前に公園スタッフとともに、環境教育と改良かまどの普及活動をおこなうことにしました。環境教育はおもに近くの小学校の生徒を対象におこないました。学校の先生に講師になってもらい、公園からもちこんだテレビで、ケニアやタンザニアの国立公園の映像を見せて、野生動物保護の重要性を訴えたのです。小学生の反応は良く、この授業は、いつも学校中の子供たちが集まる大盛況の授業となりました



写真1 授業風景



写真2 改良かまど

(写真1)。しかし冷静に考えると、子供たちはテレビに興味があったのです。電気がない村でテレビは珍しく、テレビを見るということ自体が非日常的な出来事だったのです。学校の先生や公園スタッフは、声をからしながら野生動物保護がいかに大事か、ということを教えようとするのですが、どの程度伝わったのかは疑問です。生徒だけでなく、大人にもこのような上映会をしましたが、子供たちと反応は同じでした。

もう一つ試みたことが改良かまど(写真2)の普及です。ふだん、女性は三つの土器を3点におき、その上に調理器具をのせて調理をします(写真3)。燃料となる木は、開いた三方の入り口から入れます。一方、改良かまどは粘土を含む土で覆いをして、熱効率をよくしようとしたものです。このときすでに町では、改良かまどが普及し始めていました。村でもこのようなかまどが普及すれば、森林伐採が少し緩和されるのでは、という公園スタッフ一同の発想があったとともに、アンケート調査で、最近燃料となる木をとる森林が近くになくなって困っているという村人の話を聞いていたので、村人のニーズにも合っていると判断したのです。大半の村人はイスラム教徒で、女性はなかなか



写真3 調理のようす

か外に出てきてくれないのですが、女性ばかりを集めて改良かまどづくりの講習会を何度か開きました。このとき、ある女性が「かまどの作り方なんて、教えてもらわなくても知っているわ」と言いました。そのときは、なぜこの女性が改良かまどを作らないのかを詳しく聞けなかったのですが、そのことが実感となって分かったのは、大学院生になって再びこの地域でフィールドワークを始めてからでした。

### 村に住む

大学院生のときのフィールドワークでは、自然保護区内ではなく村人の家に住むという決意をしていました。それは、結局協力隊のときにおこなったフィールドワークのやり方では、村人が「どのような生活をしているのか」が分からなかったからです。協力隊のときに知り合った村人の家に出向いて、いきなり「今日から一緒に住むけど、いいですか?」と聞くと、あっさりとOKしてもらい、村で住むという念願がかないました。

女の人と食事の準備を一緒にしたり、男の人の農作業についていったり、一緒にごはんを食べるといった、一緒に暮らしているのなら当たり前のことから始めました。そうすることで、徐々に村人がいかに自然資源に依存しながら暮らしているか、ということが実感として分かるようになりました。一例をあげるなら、さきほど述べた改良かまどを女性がつくらない理由は燃料木の不足にあるのではなく、夜が寒いということだったのです。町の家では、調理場と寝る場所は別です。しかし、村では調理場と寝る場所は一緒で、この地域は夜間非常に寒くなるのですが、調理をしたあとの温もりで一気に寝つくことができるのです。

改良かまどのように覆いをしてしまうと、家の

中が十分に暖まりません。この地域は病院やクリニックがないため、赤ちゃんが風邪を引くと、日本では考えられないくらいに、すぐに死んでしまいます。家を温かくしておくことは、女性にとってとても大事な仕事だったのです。

このようなことは、一晚村で寝れば分かることでした。さらに、保護区で働いていたときには、村人が燃料のために森林を伐採していることや放牧していることを非難していたのですが、よく観察していると彼らは農作物の残滓を利用したり、家をたてる建材を植林したりするといった、さまざまな工夫をしていました。それでも足りない時期に、自然保護区内の木を切っていたのです。彼らを教育して野生動物保護の大切さを教えたり、

新しい技術を導入したりする前に、彼らの営みを理解し、支援することこそ大切である、ということが分かったのです。

もちろん、何度同じ場所でフィールドワークをしても、新たな発見が常にあつて、多分、一生「これですべて分かった」という実感はもてないような気がします。援助する側だから、専門家だから、何でも知っているということではなく、外部者であることを自覚しながら「フィールドワークをして学ぶ」という姿勢を常に持ち続けることが必要で、この「学ぶ」という姿勢が次の「かかわる」「つくりだす」ということに影響していくのではないかと、考えています。

(にしぎき・のぶこ／福島大学・元 JOCV 隊員)